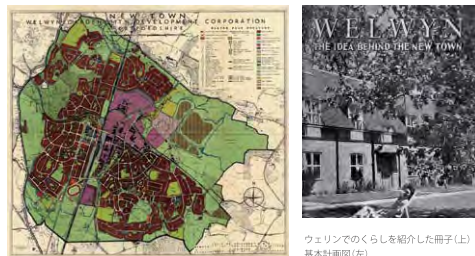


ひとはく20年のお宝

1992年10月の開館から20年にわたり、ひとはくはさまざまな標本・資料の収集と活用に努めて来ました。ここでは国内を代表するコレクションや貴重な標本などを紹介します。



ウェリンでのくらしを紹介した冊子(上) 基本計画(左)

ウェリン・ガーデン・シティ (Welwyn Garden City) の都市計画資料

ウェリン・ガーデン・シティは、都市計画家 E. ハワードが提唱した「田園都市構想」に基づいて 1920 年代から建設されたイギリスの都市です。販売当時のパンフレットや図面からは、都市と農村の共生を理想とした都市計画の理念や緑地配備を学ぶことができます。ウェリンやレッチワースに体现された田園都市の思想は、日本のニュータウン計画に影響を与えたのももちろんのこと、人と自然の共生を掲げるひとはく開館時からの理念にも大きく関わっています。

上田萌子(自然・環境マネジメント研究部)



ハイハマボス(左) 1939年秋上郡山崎町産(船尾末雄コレクション) イノホウキ(右) 1968年尾路市大生産(船尾末雄コレクション)

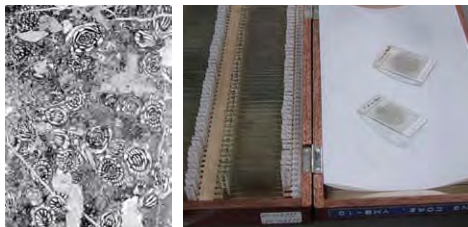
県内で絶滅したとされる植物の証拠標本

兵庫県内で長年、誰にも採集されず、目撃情報もない植物は、兵庫県版レッドデータブックで「絶滅」とされている。それらがかつて、本当に県内に生育していたことを証明する古い標本が、ひとはくの植物標本庫に保管されています。ハイハマボスとイノホウキが、いずれも上の写真の標本が最後で、それ以後見つかっていません。生育環境は激変しており、絶滅したと考えられます。寄贈標本のなかにはこのような貴重な標本が含まれています。

高橋 晃(自然・環境評価研究部)



コバンミツハツツツ ウリカエテ ヤマザクラ シュンラン ヤマウグイスカグラ ひとはく生物多様性の森

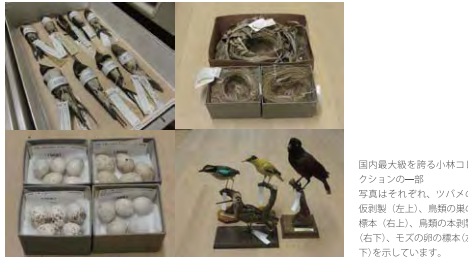


石炭紀フズリナ石灰岩の薄片写真(和歌山県由良、皆森石灰岩) 薄片収納箱と石灰岩薄片(金薄片に産地番号と登録番号が記されている)

小林文夫コレクション(有孔虫化石など)

「小林文夫コレクション」は古生代後期と中生代の有孔虫化石を含む岩石薄片 36,887 枚と母岩や岩石チップ 1,711 点から成ります。それらの多くは博物館開館時から日本各地のほかカナダ、トルコ、イタリア、フランス、タイなどで採集された石灰岩がもたっています。この 20 年間に、これらをもとにした論文 62 編が公表され、「小林文夫コレクション」の学術情報と人と自然の博物館の名を国内外に発信し、学術交流に寄与してきました。また、博物館セミナーなどで活用されています。

小林文夫(自然・環境評価研究部)



国内最大級を誇る小林コレクションの一部 写真はそれぞれ、ツバメの仮剥製(左上)、鳥類の巣の標本(右上)、鳥類の本剥製(右下)、モズの卵の標本(左下)を示しています。

小林コレクション(鳥類標本など)

ひとはくに収蔵されている標本の中で、「国内最大級」と言えるコレクションの一つが「小林コレクション」です。小林コレクションは、神戸市灘区在住であった小林桂助氏(1908年～2000年)によって寄贈された鳥類の剥製・卵・巣の標本であり、総計は 15,442 点にもおよびます。このコレクションは学術的な貢献も大きく、2012 年には、ツバメの仮剥製(写真左上)によって「北と南のツバメの形が違うこと」を新たに解明しました。今後も、小林コレクションによって、鳥類の意外な事実が明らかされるかもしれません。

布野隆之(自然・環境マネジメント研究部)

ひとはく生物多様性の森

「ひとはく生物多様性の森」は、博物館隣の深田公園内にある、自然・環境再生研究部の研究成果から考案された、生物多様性の保全を目的とした管理方法で育てられている里山です。ここでは、林内の光環境を悪化させる照葉樹やササが選択的に刈り取られ、森林生の植物を中心とする生物多様性の豊かな環境が創出されています。また、生物多様性保全のための森づくりをすすめる市民団体、企業への研修や子どもたちの環境学習の際に、生きた資料として活用されています。

橋本佳延(自然・環境再生研究部)

兵庫県立 人と自然の博物館 hitohaku news paper

学び!!

人と自然の応援情報誌

ハローネー79号 246頁 012-00583

ひとはく新聞



TEL:079-559-2001 (ひとはくの代表番号です) TEL:079-559-2002 (学校や団体のご利用の方はこちらにおかけください) TEL:079-559-2003 (セミナーやイベントなどのお問い合わせ先です)

〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目 兵庫県立人と自然の博物館 (兵庫県立大学 自然・環境科学研究所) http://hitohaku.jp

ひとはくの20年とこれから

2012年10月、ひとはくは開館20年を迎え、人にたとえれば成人に達しました。開館記念式典は秋篠宮殿下のご臨席を仰ぎ、賑々しく執り行われました。

博物館は建物があって、館員がいて、展示やさまざまな事業が提供される場所です。しかし、それらは博物館のためではなく、博物館を利用して、博物館で学習する人たちのために展開するものです。ひとはくも、ひとはくを活用して下さる人たちといっしょに、過ごしてきた20年を振り返り、これからの展開を考えようとしています。

人の成長の過程に見るのと同じように、ひとはくもさまざまなできごとを経験し、喜んだことも緊張したこともありましたが、ひとはくの建物や館員やイベントが経験したこともありましたが、ひとはくといっしょに学び、楽しんで下さった人々といっしょに通り過ぎた道でもありました。20年を最大限に活用したのは、ひとはくそのものであり、ひとはくを活用して生き甲斐をつくりあげてきた人たちが多かったでしょう。

人にたとえれば成人に達したひとはくは、これからは大人のやり方で博物館活動を展開していきます。それは、博物館を楽しむ人たちが、博物館を活用し、それによってさまざまな喜びを展開していける場を整えることであるはず。小さな子どもさんたちのためのキッズ対応も、学校教育を補完する博学協働も、大人の余暇を活用し、とりわけシルバー世代の学習を応援する生涯教育支援も、博物館のスケジュール＝生涯学習支援カリキュラムのひとつとなるはず。学習のためのカリキュラムは、一方的に与えられるものではなく、それを享受する



兵庫県立人と自然の博物館開館20周年記念式典

人の好みが入っていったら充実したものになるはず。博物館に関心のある人の、博物館活動への積極的な参画を期待します。20周年をひとつの区切りとして、ひとはくがやってきたことを『みんなで楽しむ新しい博物館のこころみ』(研成社刊、¥1,890)という本にまとめました。ひとはくをよく知って下さっている人たちは、館員側の考え方がこれでいかにどうか、厳しい批判をいただきたいものです。ひとはくのこころをほとんど知らないという方は、博物館をうまく活用するために、ひとはくの活動ぶりをこれら知っていただきたいものです。

日本人が伝統的にうまく調和させてきた人と自然の馴染み合いを、現代人の多くは忘れていきます。今こそ、人と自然の関わりとは何かを知り、崩れ去ろうとしている共生のころを取り返すべきときです。これは誰かに教えられてやることではなく、シルバー世代からキッズまで、すべての人がその気になって取り組まなければいけないことでしょう。人と自然の博物館は、その名が示しているように、そのための基盤づくりに貢献することを希求しています。

よりよい明日の地球の構築のために、より多くの人がひとはくとの協働を楽しんで下さることを期待します。

岩槻邦男(兵庫県立人と自然の博物館 館長)



兵庫県立御影高等学校環境科学部との部交流の模様

「ひとはく」を御覧される秋篠宮殿下

シンポジウム「新たな博物館の役割と地域貢献」を御覧される秋篠宮殿下

ひとはくコラム キノコは植物なの？

私はコケ植物の分類が得意なのですが、博物館に就職してからキノコ勉強も始めました。門前の小僧でも20年努力があるなんかに人の役に立てるようになるのですが、それではキノコは植物なのですか、という質問にはいつも「キノコは植物です。生き物の本質にせまる問いかけだからです。」

光合成によって自分自身で養分をつくりだすのが植物です。一方動物は植物を食べたり植物を食べる動物を食べることで生きてゆきます。キノコといえば葉緑素は持たず光合成をしませんし、えさを求めて動くわけでもありません。それらは植物でも動物でもありません。自然界では植物の役割から生き物を見ると、養分を作り出す生産者(植物)、養分をたぐって消費する動物(人に分けられますがそれだけで足りません)、消費された養分をリサイクルし、もともとにも役割が必要で、毎年つくる落ち葉、動物の糞や死体も分解されて土に帰ります。人の世界でも同じく、下水道や廃品回収を通じてまたび利用可能な資源に戻すことが世界がうまくまわっています。自然界においても大抵のことは循環の役割をこなすものは分解者と呼ばれています。そしてこの分解者重要なメンバーこそ、実は私たちが親しみ、そしてキノコと呼んでいる菌類たちなのです。

こんなキノコを見かけたら、そこから落ち葉をかき分けて地面をのぞいてみてください。真っ白い菌糸を広げて熱々と落ち葉を分解しているキノコの姿がそこには広がっています。

秋山弘之 (兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員)